

創作することの楽しみ―水上比呂美論

真島 陽子

三十一音の韻文としての短歌。わずかな言葉でリズムを作り、豊かな世界を紡ぎ出す。水上比呂美の作品は、言葉を広く探求し、目に見えない世界を言葉で描くことに果敢に挑戦している。第一歌集『ざくろの水脈』、第二歌集『潤み朱』の中から作品の魅力を味わってみたい。

むなもとの鉤ひとつをはづすと月下美人
がはつかにひらく 『ざくろの水脈』

目葉をさせばのみにまはりきてひとふで
書きのやうなるわたし

子の部屋は旅の途中の船のやう床にころが
るミネラルウォーター 『潤み朱』

みづならの林に暗き草そよぎユニコーン去
るごとき風音

一首目、月下美人の花がゆっくりと開いてゆく様子を胸元の鉤を外す仕草に喩え、月下美人の妖艶な雰囲気を表している。漢字は最小限にし、平仮名表記でゆったりとさせ、時間のゆっくりとした経過を表現している。

二首目、目葉を差した直後の姿勢を「ひとふで書きのやうなる」と喩えている。「ひとふで書き」は、目葉の雫が体内

に流れる筋とも思える。目葉を差した感覚が蘇ってくるような読後感がある。

三首目、子ども部屋を航海中の船に喩え、床にあるミネラルウォーターに焦点を絞って描いている。母としての心の揺らぎまで伝わってくるような、余韻ある一首。

四首目、実景としてはミズナラの林に風が吹き、草がそよいだというそれだけのことだが、作者は「暗き草」で風景に陰影を描き（陰影を描くことで光も感じさせる）、ユニコーンを読者のまぶたに一瞬登場させ、目に見える世界の向こう側の世界を創り出している。直喩の卓抜な言葉の選択によって、単純な喩えにとどまらず、読者をここではない異世界へ誘う。

水上作品が、短歌に豊かさや深みを与えようという意識で創作されている点は注目すべき特徴である。日常の中の異世界へ誘う手法は、直喩法に留まらない。

群青の折りたたみ傘ほどきたる神の手あり
て朝顔ななつ 『ざくろの水脈』

朝顔を折りたたみ傘に見立て、ひらく様子に「神の手」という言葉を置くことで自然の神秘への感動を詠っている。

「朝顔ななつ」とあるが、第一、第二歌集共に数詞が詠み込まれている作品が多いのも特徴である。

焼きものは灼熱宇宙くぐりきてしんとうつ

くし備前焼の赤

『ざくろの水脈』

目の前の赤い備前焼に炎を思い、「灼熱宇宙」という言葉の力を借りて炎で焼かれている時間や熱を印象的に描いている。特別な素材でなくても、言葉を広く探求し配置すれば、たった一語の力で歌を豊かにすることができるということも水上作品は見せてくれる。

噴火口と流星落ちし焦げ跡と水脈ありて球

体ざくろ

『ざくろの水脈』

石榴に天体を重ねて観ているスケールの大きな歌である。

短歌は焦点を絞り、小さなことを詠うのに適した器だという概念もあるが、そのような枠を飛び越え、時間的空間的広がりのある作品である。

空のした石がひつそり死んでをりあたたか

き陽が掌でなでてをり

『潤み朱』

夜の渋谷暗渠のうへを歩きつつ銀漢のみづ

おとを思へり

一首目は、石に日差しが注いでいるというごく当たり前の光景を切り取って、「生」と「死」のある景色として描いている。二首目、渋谷の街を歩きながら、自分の足元に「銀漢」が水音を立てて流れていると詠う。このように、言葉をもつてありふれた日常の中に見えない世界を重ねて描き、重層的な世界へ昇華させるといのが、水上作品の特筆すべき

魅力である。

また、もう一つの特徴として、言葉の響きを楽しんで作っている作品が多くみられることが挙げられる。

下降してゆくは美し夕陽、雪、落葉、散る

花、五十路のをんな

『ざくろの水脈』

編み棒のふれあふ音のかそけさの秋の夜ふ
けに肩かけを編む

一首目は、美しく下降していくものを「夕陽、雪」と柔らかい「ゆ」の重なりと「落葉、散る花、五十路のをんな」の「ち、ぢ」の重なりを響かせて詠っている。下降してゆくものを集め、枕草子を現代短歌にしたように面白い一首だ。二首目は、秋の夜更けに肩掛けを編んでいる様子。は行、か行、さ行の音を多用して、無心に編み棒を動かして編んでいる音を歌に織り込んでいる。

筑波嶺の空はるばると舞ふ鷺の和式トイレ

が減りゆく日本

『ざくろの水脈』

パンプスとイソピルアンモニウム入り除草
液あり靴箱のなか

『潤み朱』

一首目の上旬は、「和式トイレ」の「わし」を引き出すための序詞。筑波嶺の空をダイナミックに飛ぶ「鷺」から、地上の小さな個室である「和式トイレ」を導き出すユーモアに遊び心を感じ、短歌を楽しんで作っている作者像が浮かんでくる。

二首目は片仮名語の硬質な響きをびりりと効かせている。「パンプス」「イソピルアンモニウム」の中で「パ行」が響

き合って、早口言葉で声に出して読みたくなる作品だ。この作品からも、深いテーマの歌ばかりではなく、意外性のある言葉を組み合わせ知的な遊びを楽しんでいる作者像が浮かんでくる。

水上作品のように、言葉を吟味して作れば軽い内容でも味わいのある歌ができる。殺伐とした現代を見つめる時、重いテーマを詠むことが多いがちだが、このような短歌を作る心の余裕があっても良いのではないだろうか。

とはいえ、『さくろの水脈』と『潤み朱』のもっとも魅力的な特徴は、日常の風景を違った視点で見せてくれるところである。テーマとしては「生」や「死」に関わるものが多いようだ。

われと死の中間にゐる父親のひたひに夏の
夕あかり差す
『さくろの水脈』

くづほるるまへの朽木のほひせり白きべ
ツドに起きゐる人は

一首目、自分と父親との位置関係を「死」という観点で見つめている。水上の作品には位置関係を詠んだものも少なからずあり、物や人の位置関係に敏感であると感じた。この一首では、年齢順に死ぬという前提で「死」と「われ」の間に「父」がいるという事実を冷静に、感傷を排除して詠っている。焦点を「ひたひ」に絞ることで、まるで死神に額を狙われているかのような凄味さえ感じる。実際、第一歌集には父への挽歌も収録されているので、この作品を作るときには死期が近いことが分かっていたのかもしれない。

二首目は、「死」のにおいのする歌である。病に臥せている人の独特の湿ったにおいを「朽木のほひ」と表現したのだろう。病者に漂うにおいが「くづほるるまへの朽木のほひ」という卓抜な表現で再現されていると感じた。

青ぞらに真つ直あがるうすけむりその順番
はだれも知らない
『潤み朱』

「青ぞらにあがる煙」とは、火葬の煙のことだろう。「死」が訪れるのは必ずしも年の順とは限らない。「その順番は誰も知らない」と静かに言い収めて余韻を残る。

満月が宙ぶらりに浮かぶのを宙ぶらりん
の地球より見ぬ
『潤み朱』

この作品も先ほど述べたように位置関係に注目した一首である。地球から月を眺めている視線、そしてもっと大きな視野で宇宙に浮かぶ地球と月を俯瞰している視線がある。もちろん、実際に見ているわけではないが鮮明に読者の脳裏にも地球と月が「宙ぶらりん」に浮かんでいるのが見える。この場合「宙ぶらりん」という言葉は何をイメージさせるだろうか。読む人によって様々かもしれないが、「宙ぶらりん」は不安定な様で、不安定な中で全ての「生」が奇跡のように生きていくことに作者は思いを馳せていると感じられないだろうか。

砂時計未来の器より過去の器へ落ちゆくひ
とつぶひとつぶが今
『潤み朱』

この一首も時間の位置関係を捉えていると言えないだろう。時間とは、「生」であり砂時計の砂を見ている作者はひ

とつぶの「今」を生き、その一瞬一瞬が「過去の器」へと収まっていく。「今」という一瞬を目に見える「ひとつぶ」に託しているところに発見があり、細かい視点の中にスケールの大きなテーマがあつて味わい深い。

あたたかくなつたら行くよもうすこしすずしくなつたら行くよ 来ざりき

『さくろの水脈』

会ひたい日会ひたくない日会はない日会へる日ずつと会へなくなる日 『潤み朱』

第一歌集、第二歌集それぞれから、「会う」ことをテーマにした作品。特に二首目は「会う」という単語を軸に、人の心理や状況を巧みに詠み込んでいる。凝縮した物語のような秀歌である。言うまでもなく「会へる日」は「生」、「会へなくなる日」は「死」。誰にとつても詠いつくすことのできな大きなテーマを水上の目線で様々な角度から詠っているのだ。

もう一つ特筆すべき点は、第一、第二歌集それぞれに意欲的な作品があることだ。『さくろの水脈』には「美男な鰐」というタイトルで七ページに渡る長歌と反歌二首が掲載されている。

サボテンの花のほとりを 向かうより這ひ来たるもの 新宿のペットショップで 目の合ひし美男な鰐と マンションで同棲はじむ わが愛でしどんな鰐より さはやかで尻尾の長く わがままな牙がかはゆく

わうぼうな足も好まし 此のつも年下の彼 星影を浴びてゆらめく 浴槽の鰐はけふから わたくしのたからものなり (略)

新宿のペットショップでの「美男な鰐」との出会いと愛憎の日々と別れを劇的に描いていて圧巻だ。この長歌からも言葉を紡ぎ、創作することを存分に楽しんでいる作者像を見ることができると思う。

そして、『潤み朱』には『古事記』の中から三首を選び、その歌の万葉仮名を頭に置いた「八雲立つ」という九十六首の連作が掲載されている。あとがきには創作の経緯や歌集掲載に当たって高野公彦氏に『古事記』に関連した内容の歌を増やすように言われ、作り直したというエピソードが記されている。

(略) 広辞苑、漢字源、ことわざ名言辞典、地図帳などを総動員して、脳みそが沸騰するくらい考えました。唸り続けた日もありましたが、作り終わってみればその苦労は大きな財産になるとてもよい経験でした。この九十六首があったから、こんなに早く第二歌集ができたのだと思います。

一部抜粋であるが、懸命に言葉を探求して歌を紡ぐ苦労と喜びが伝わって来る。

秋ふかき多摩の横山日の入りて空につらなる潤み朱の雲 『潤み朱』

歌集題となった一首。穏やかな自然詠の中にも、言葉を探求し歌を楽しんで紡ぐ、水上の真摯な創作姿勢が見える。